

「解答・解答例等」「出題の意図」

選抜区分	2026（令和8）年度 編入学（学士入学を含む）試験 経済学部経営情報学科 （科目名：マネジメント・会計・情報）
<p>専門試験：</p> <p>1. 出題の背景・求める能力</p> <p>本試験の筆記試験では、編入学後に本学科のカリキュラムに適応できるか判断するため、マネジメント・会計・情報に関する基礎的な知識や論理的思考力を確認する問題を課しています。</p> <p>問題1は、経営資源の一つ“ヒト”を対象にマネジメントを検討する人的資源管理論（以下、HRM）からの出題です。この問題は、本学に編入するに際して、HRMの背景にいかなる学術的視座が入っているのかをいかに批判的に思考できているかを確認するために設定しています。</p> <p>問題2は、具体的な会計手続きを学ぶ「簿記」から発展して、抽象的な理論を思考する「会計学」を学ぶにあたって必要な知識を修得しているか否かを確認するために、会計学における基礎的な概念を問う問題を課しています。なお、編入学後の専攻の多様性を踏まえて、「財務会計」と「管理会計」からいずれかを解答する選択問題となっています。</p> <p>問題3では情報に関する基礎的能力を身に着けているかを確認するための基本的な問題を出題しています。</p> <p>2. 解説(解法・解答例)</p> <p>各問題について、解答例を以下に示します。</p> <p>問題1については、以下2つのタイプの模範解答を示します。これらのいずれかに類似する解答を正解とします。なお、模範解答には参考文献を記しているが、これはその模範解答の正当性を保証するものであり、受験学生に要求しているものではありません。</p> <p>解答例1</p> <p>HRMはそれまで理論的基盤が曖昧であり、そのことで学術的な地位が低くなっていた。他方でその当時、近接する学術領域として、心理学を土台とする組織行動論（以下、OB）が理論体系として確立されてきた。HRM研究者はそこに目をつけ、心理学（およびOB）を用いて理論根拠が明瞭なHRMのあり方を示そうとしたため（Kaufman, 2014）。</p> <p>解答例2（学生らしい解答を想定）</p> <p>当時、心理学は、その詳細を知らない者にとって人間の行動原理を説明できる有用な理論として映っていた。HRMにとって、人間の行動は分析対象として最も注目されてきた事象であり、自身の説明力を向上させることために心理学が最も有効と考えられていたため。</p> <p>参考文献</p> <p>Kaufman, B. E. (2014) The historical development of American HRM broadly viewed. <i>Human Resource Management Review</i>, 24, pp. 196-218.</p> <p>問題2は、選択問題で、以下に各選択問題の解答例を示します。</p>	

(1) 直接原価計算を採用する1つ目のメリットは、操業度の変化によって1製品あたりの製造原価が変動しなくなることで、過剰生産による1製品あたりの製造原価の過小評価を防ぐことができる点である。2つ目は、製造部門の管理可能な製造変動費を把握することで、製造部門の業績評価やCVP分析に役立つ情報を提供することができる点である。

(2) 発生主義会計とは、現金の収入支出ではなく、財やサービスの提供やそれに伴う経済的資源の消費に基づいて収益費用を認識する会計である。この発生主義会計は、企業活動に伴う経済的価値の生成や消費の事実に基づいて収益と費用を計上する発生原則、財やサービスが実際に取引されることで収益の発生を認識する実現原則、経済活動の成果である収益とそれを獲得するために費やされた費用を対応づける対応原則によって支えられている。

選択問題(1)は、管理会計における基礎的概念である「直接原価計算」について問う問題です。「直接原価計算」と対になる「全部原価計算」の問題点を念頭に、「直接原価計算」のメリットが整理されていれば高評価となります。選択問題(2)は、財務会計における基礎的概念である「発生主義会計」について問う問題です。「発生主義会計」や「利益」と、「現金主義会計」や「現金収支」の違いを説明することができていれば高評価となります。

問題3はシステムの稼働率に関する基礎的な問題です。(1)は並列部分もすべて稼働している必要があるため、コンピュータA、B、Cがすべて稼働している必要があります。すべて直列に接続された場合と同様に考えることができます。(2)は並列部分があり、BとCのどちらか1台が稼働している稼働率とAの稼働率の積により求めることができます。

解答例：

(1) BとCの両方とも稼働しなければならない時の並列部分の稼働率は、 $0.9 \times 0.9 = 0.81$ 。よって、システム全体の稼働率は、 $0.9 \times 0.81 = 0.729$ 。

(2) BとCのいずれも稼働していない率は、 $(1-0.9)(1-0.9) = 0.01$ 。BとCのいずれかが稼働していればよいので、並列部分の稼働率は、 $1-0.01 = 0.99$ 。よって、システム全体の稼働率は、 $0.9 \times 0.99 = 0.891$ 。

「解答・解答例等」「出題の意図」

選抜区分	2026（令和8）年度 編入学（学士入学を含む）試験 経済学部経営情報学科 （科目名：面接）
<p>面接：</p> <p>1. 実施の背景・求める能力</p> <p>本面接試験は、本学科で学ぶために必要な適性や意欲を有しているかを確認することを目的としています。本学科では、経済学、簿記会計、情報学を柱として、現代社会や企業活動を理解し、データ分析手法などを活用して諸課題の解決に取り組むことのできる人材の育成を目指しています。そのため、志望動機や将来の目標、社会・経済・経営に対する関心、簿記会計や情報技術への興味・理解などについて質問し、本学科での学修に必要な学習意欲、論理的思考力及びコミュニケーション能力を確認します。</p> <p>2. 解説・評価基準</p> <p>本面接試験では、学科で学ぶカリキュラムを理解し、志望理由や回答内容に一貫性があり、本学科で学ぶ目的が明確であるかを評価します。また、質問に対して適切に応答し、自らの考えや経験を具体的な根拠とともに説明できるかを確認します。さらに、社会や経済に関する事象に対して主体的な関心を持ち、多面的に考察しようとする姿勢が見られるかについても評価します。評価に当たっては、知識量の多さのみを重視するのではなく、自ら考える力、表現力、コミュニケーション能力を総合的に評価します。</p>	